

鳴門教育大学附属特別支援学校
学校関係者評価報告書

(令和4年度)

令和5年3月

学校関係者評価委員会

学校関係者評価委員会が実施した学校評価について

はじめに

本報告書は、保護者、大学教員、地域住民等で構成された学校関係者評価委員会が附属特別支援学校の教育活動の観察や校長他との意見交換等を通じて、附属特別支援学校の自己評価の結果について評価することを基本に学校関係者評価を実施し、その結果を報告書として取りまとめたものである。

1 評価の目的

学校評価は、次の3つを目的として実施するものである。

- ① 学校が、自らの教育活動と学校運営について、目指すべき目標を設定し、その達成状況や達成に向けた取組の適切さ等を評価することにより、学校として組織的・継続的な改善を図ること。
- ② 学校が、自己評価及び保護者など学校関係者等による評価を実施し、その結果を公表し、内容を説明することにより、適切に説明責任を果たすとともに、保護者、地域住民等から理解と参画を得て、学校・家庭・地域の連携協力による学校づくりを進めること。
- ③ 学校の設置者が、学校評価の結果に応じて、学校に対する支援や条件整備等の改善措置を講ずることにより、一定水準の教育の質を保証し、その向上を図ること。

2 評価のスケジュール

令和4年6月 第1回学校関係者評価委員会

- ・学校評価の目標及び評価項目について説明
- ・学校評価実施スケジュールについて説明

令和5年2月 第2回学校関係者評価委員会

- ・自己評価書に基づき自己評価結果について説明
- ・評価員による学校関係者評価

3 学校関係者評価員（令和5年3月現在） ○は委員長

- 橋本 俊顯 徳島赤十字ひのみね総合療育センター 顧問
- 濱田 欣 社会福祉法人カリヨン 介護老人福祉施設令陽施設長
- 大谷 博俊 鳴門教育大学 特別支援教育コース 教授
- 里見 正威 地域住民
- 原 健二 杉の子会 前会長

4 本評価報告書の内容

(1) 学校関係者評価結果

「学校関係者評価結果」では、評価項目（重点目標）①～④の「実施状況」「評価指標の達成度及び成果」を総合的に判断し、「評価根拠」を示し、4段階評価で評価を行っている。

(2)参考

参考では、自己評価書に掲載されている「学校の現況及び目的」を転載する。

5 本評価報告書の公表

本報告書は、鳴門教育大学に提供するとともに、設置者に提出する。また、ウェブページ (<http://www.shien.naruto-u.ac.jp/>) への記載により、広く社会に公表する。

(1) 学校関係者評価結果について

鳴門教育大学附属特別支援学校の学校関係者評価は、内容を総合して評価した結果、4段階評価中「A 十分達成されている」と判断する。(R5.2.24実施)

(A→十分達成されている, B→達成されている, C→取り組まれているが, 成果が十分でない, D→取組が不十分である)

※自己評価書(学校自己評価)については、ウェブページ (<http://www.shien.naruto-u.ac.jp/>) 参照

主な成果として、次のことが挙げられる。

重点課題(評価項目)

① 学習指導要領改訂の趣旨を踏まえた教育課程の編成、実施及び研究の推進

- ・個々の障がい特性や発達の状態を考慮した指導の個別化、学習の個性化、指導と評価の一体化により適切な指導と必要な支援を充実
- ・特別支援学校におけるSTEAMIC (STEAM教育for inclusive and citizenship) 研究
- ・ポジティブ行動支援

〈小学部〉

- 1)生活単元学習を中心に、学習活動で取り上げる単元や題材について、各教科等での関連性を確認しながら指導計画を作成し、実施することができた。
- 2)実施した学習活動について、学部通信や本校ホームページ等で定期的に保護者に説明や紹介をすることができた。

〈中学部〉

- 1)個々の生徒の実態や生活に応じた「働く体験学習」を実施するとともに、保護者への進路に関する情報提供を実施することができた。
- 2)ICT機器を活用した授業づくりを行い、生徒の情報活用能力を高めるとともに、教員の教育力向上を図ることができた。

〈高等部〉

- 1)学校研究テーマ「指導と評価の一体化」に沿った学部研究を教員共通理解の下で実施し、生徒の実態や青年期に応じた授業づくりができた。
- 2)新しい生活様式に基づき、ICT機器を活用し、生徒の情報活用力を高めると共に、STEAMIC教育やポジティブ行動支援の視点を取り入れた教育活動を行うことができた。

〈教務課〉

- 1)個別の指導計画(主に評価)の記述内容の見直しを行い、円滑な作成と活用に向けた改善を行うことができた。

- 2)各教科（授業）等の年間指導計画の適切な評価と活用により授業改善に向けた取り組みを充実させることができた。

〈研究課〉

- 1)学習指導要領の趣旨を踏まえた教育課程での『「主体的な学び」に向かう児童生徒の育成を目指した授業づくり』についての研究を推進することができた。
- 2)児童生徒の障がい特性や発達の状態を考慮した個別最適な学習のための指導と評価の一体化において、指導方法（手立てや場面）を共有し、授業づくりや授業改善を行うことができた。

② 学校・家庭・地域や関係機関等との連携と社会に開かれた教育課程の実現

- ・切れ目ない支援とキャリア教育等の充実

〈指導課〉

- 1)人権尊重の視点に立った安心安全な学校行事を企画立案実施することができた。
- 2)生徒心得を活用した細やかな生徒指導と、互いを尊重し合える人権教育の推進に、教職員が同一歩調で取り組むことができた。

③ 特別支援教育のセンター的機能のさらなる充実

- ・地域のニーズに即した教育相談や研修等の機会や内容の充実
- ・地域や徳島県における特別支援教育への貢献

〈発達支援センター・特別支援課〉

- 1)校内の特別支援教育に関する体制整備及び教員の専門性の向上を図ることができた。
- 2)地域の多様なニーズに応える相談・支援機能の充実を図ることができた。
- 3)地域のニーズに応じた情報提供及び研修協力を行うことができた。

④ 家庭や地域、関係機関等と連携した安全・安心な教育環境の整備

- ・危機管理マニュアルの見直しや教室等学校施設の点検の徹底
- ・児童生徒が複雑な状況や変化に対応する力を育成する防災訓練の工夫

〈総務課〉

- 1)安全管理点検表を作成し、校内108か所の安全点検を実施し、安全・安心な教育環境を整備することができた。
- 2)GIGAスクール構想に基づき、学校・家庭でのICT機器活用のための環境整備を進めるとともに、1人1台端末のWi-Fi接続を含めた家庭への持ち帰り実施や学習課題の提供を行うことができた。

(2) 学校関係者評価委員からの提言等

○保護者と教員の評価におけるギャップがある箇所については、より感度を上げて、保護者との連携をしっかりと行うことが大事である。また、学校評価アンケート結果において、教員の各項目における人数も示していただければ、より分かりやすいものになるかと思う。

- ICT活用状況を具体的に知りたい。フィルターの配慮や持ち帰りの活用法など。
→個別の最適化を基に、タブレットの有効性を確認しながら、子供の実態に合わせて学べるよう工夫している。
- 例えば、授業中の居眠りなど問題的行動があった場合にどうするか。
→うまく自分の気持ちを表現できないということが前提にある。それに至るまでには必ず理由があり、どうしてそうなるのかを大人が考え、それを早く見つけてやるのが大切。しつけ、挨拶はソーシャルスキルの一部。
- 子供理解をしていくことが一番大事。
- 時代の狭間で難しいことが多い。線引きが難しい場合もあり、事故を防ぐための安全を取ると虐待や暴力などと疑われることもあるが、そのまま放っておく訳にもいかない。しかし、事故が起こらないよう気を付けることや命を守ることは大切である。

(参考) 学校の現況及び目的

1 現況

- (1) 学校名 鳴門教育大学附属特別支援学校
- (2) 所在地 徳島市上吉野町2丁目1番地
- (3) 学級等の構成
- 小学部 3学級(複式)
 - 中学部 3学級
 - 高等部 3学級
- (4) 児童生徒数及び教員数(令和4年5月1日)
- 小学部18人, 中学部18人, 高等部24人 児童生徒数60人 教員数30人(正規教員)

2 目的

(1) 目的・使命

本校の目的は、附属特別支援学校校則第1条において「知的障害及び自閉症の児童生徒に対して、小学校、中学校及び高等学校に準ずる教育を施し、あわせて障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るために必要な知識技能を授ける」学校、中学校及び高等学校の要請に応じて、「幼児、児童又は生徒の教育に関し必要な助言又は援助を行うよう努める」と定めている。

また、校則第1条には「鳴門教育大学(以下「本学」という。)における児童及び生徒の教育に関する研究に協力し、かつ、本学の計画に従い学生の教育実習等の実施に当たることを目的とする。」と定めており、具体的には教員養成大学の附属特別支援学校として、次のような使命をもった学校である。

- ①大学と一体となって、特別支援教育の理論及び実践に関する科学研究を行う使命
- ②大学の学部学生及び大学院生の教育実習及び教育実践研究等を行う使命
- ③地域において特別支援教育のセンター的機能を実践的に発揮するとともに、本県の教育の発展に寄与する使命

(2)教育目標

本校は、校則第1条に示されている目的の達成のため、学校として、また学部としてそれぞれ次のような教育目標を掲げている。

<学校教育目標>

児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、教職員が協働し、児童生徒一人一人の特性や発達段階に即し、将来を見据えて教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、他者を大切にしながら、健康で豊かな生活を送ることができるような児童生徒を育成する。

<小学部>

- ① 豊かな心、じょうぶな身体を育てる。
- ② 日常の基本的な生活習慣を身に付ける。
- ③ 興味関心を広げ、自ら取り組む態度を育てる。
- ④ 人とかかわる基礎的な力を育て、集団での活動に参加できる態度を養う。

<中学部>

- ① こころとからだの調和のとれた人間力を育てる。
- ② 自他共に大切にできる態度を養う。
- ③ 生活に生かすことのできる知識や技能の向上を図る。
- ④ 個々の「参加」の質を高めて、生活を豊かにする態度を育てる。

<高等部>

- ① 心理的な安定を図るとともに、働くため健康な身体と青年期の豊かな心情を育てる。
- ② 主体的に働く意欲や態度、集中力を養う。
- ③ 将来の社会生活に必要な言語・数量に関する基礎的学力および生活技能を養う。
- ④ 人とかかわる中で社会性を身に付け、自ら生活を楽しむことができる力を養う。

(3)めざす子ども像

本校では、学校及び学部の教育目標に基づき、それぞれ次のように「めざす子ども像」を明確に示している。

<学校全体>

- 明るく、仲よくできる子ども
- じょうぶで、元気な子ども
- よく働く子ども
- カいっばいがんばる子ども

<小学部 めざす児童像>

- 心と身体の健康向上に取り組むことができる児童
- 身の回りのことが、必要な支援を得てできる児童
- 学習活動に興味を持ち、主体的に取り組むことができる児童

- 人との関わりを大切に、集団活動に進んで参加することができる児童

< 中学部 めざす生徒像 >

- 健康な身体と調和のとれたところを持つ生徒
- 他者とかかわることを楽しめる生徒
- 学びや体験をとおして「分かる」「できる」「こうすればいい」ことを自分から見つげられる生徒
- 自らの興味や関心、楽しみを広げ、様々な生活場面に参加できる生徒

< 高等部 めざす生徒像 >

- 身体と心の健康に気をつけて、人や自然を愛することができる生徒
- 進んで働こうとする意欲やチャレンジ精神をもつことができる生徒
- 自分でできることは自分でして、できないところは支援を求めることができる生徒
- マナーやルールを守って積極的に社会参加をしようとする生徒

(4) 令和4年度重点目標

① 学習指導要領改訂の趣旨を踏まえた教育課程の編成、実施及び研究の推進

- ・ 個々の障がい特性や発達の状態を考慮した指導の個別化、学習の個性化、指導と評価の一体化により適切な指導と必要な支援を充実
- ・ 特別支援学校におけるSTEAMIC (STEAM教育for inclusive and citizenship) 研究
- ・ ポジティブ行動支援

② 学校・家庭・地域や関係機関等との連携と社会に開かれた教育課程の実現

- ・ 切れ目ない支援とキャリア教育等の充実

③ 特別支援教育のセンター的機能のさらなる充実

- ・ 地域のニーズに即した教育相談や研修等の機会や内容の充実
- ・ 地域や徳島県における特別支援教育への貢献

④ 家庭や地域、関係機関等と連携した安全・安心な教育環境の整備

- ・ 危機管理マニュアルの見直しや教室等学校施設の点検の徹底
- ・ 児童生徒が複雑な状況や変化に対応する力を育成する防災訓練の工夫